



ピクタインダオン

(おさみがりにぼし)

第6号

発行日 2016年8月9日

発行人 矢代 しず

秋田市御野塩7-1-29-305

歌

いつも 歌はかげっている

鈍い調性は横たわり

聞きなれない音を

置き去りにする

複雑な旋律は

内耳に不透明な波紋をひろげる

声はかなしみ色を帯び

言葉は口ごもる

あの日 歌はほがらかだった

愉しみを奏でる絃にのせて

言葉は追憶の糸をたぐりよせた

耳は

なつかしい故郷を

記憶していた



白川郷 雨

幅ひろく

速い流れの庄川に架かるであい橋
を渡って

合掌造り

白川郷*を巡る

降りやまぬ十一月の雨

色とりどりの傘

列をなす観光客が

長いながい吊り橋を

進んでゆく

ときおり風が

葉が残り少なくなつた櫺の

雨つぶをこぼす

濡れた傘



窪地の水たまり

冷たい雨は

古びた茅葺き屋根にも降りそそぐ
掌と掌を合わせたかたち

の屋根

が雨音を吸いとる

屋根という三角の器に

しずけさが――

ゆつたりと時間が流れる

同じ方角をむいた家々に

村の伝統を守る白塗りの壁に

耳なれない旅行者のことばに

すこしかしいだ猫の首に

濡れて黒光りする木橋に

亭々とたたずむ屋敷林に

ふくらみをおびた

雨のおいは

新鮮にする



つながろうとする心を

かがやくものにふれたい目を
たちあがることばをみる耳を

降りやまぬ雨

しろい雨脚は

わたしを屋根にかえる

やがて

わたしの掌はすこし丸まり

かたちのない空そら
に

* 岐阜県白川村荻町。世界文化遺産に登録されている。

花嫁になった母

象牙いろの壁に立てかけた

和紙の絵手紙

春風にのつてやってきた

黄いろい山茱萸の花に

薄墨いろの細く流れる文字の川に

ほのかに光が

射し初めている

ほんの一瞬

うつつびとの顔

の母が

はにかみながら

わたしを見た

母の写真の傍らには

紅いろの微光がゆれる椿の花

幾重にもやさしさを巻いている

晴れやかな花びらのあたたかさに

母は

唐紅の着物を纏う

花嫁になっていた



蝶

僕は

逢いたかった

夢の記憶で

風にとかれたリボンのように

たのしげに舞う蝶に

黄いろくふくらんだ花の海から

代赭いろに輝く一匹の蝶が

姿をあらわした

無邪気にきらめく波と戯れ

やがて

蝶は草いろの空間に翅をやすめた

僕はそうと近づき

蝶の翅にふれる

と

蝶は大きく翅をひろげた

蠱惑^{こわく}いろに彩られた斑紋が光った

僕はたまらず

二対の翅のつけ根をのぞき込んだ

僕のなかで眠っていたDNA

がめざめる

息づいている指で

蝶の内部をみる

やわらかく

あたたかい

性

かすかな愛の音

がきこえてくる

そり返る

蝶

蝶は

虹の橋をわたっていった

*H氏に勧められて挑戦した

徒然のエチュード
IV

1

わたしは雪穴に落ちる

パ×××

どうしても思い出せない

ピ×××

上がることができない

目が覚めた

クレバスだ!!

2

鏡の前に立つ

左の林檎 二〇〇グラム

右の桃 一五〇グラム

こんなにしたのは誰?

3

口出し無用

現金掛け値なし

愛情のはかり方

4

先達のすぐれた作品

後輩のたゆまぬ研鑽

言葉の世界がひろがる

5

熊の字を見る

じっと見つめる

形、色、声、爪

いろんなものが出てくる

熊も近づいてくる

6

美的センスで
感動を表現する
文学を食べて
詩を立たせる

7

掘削工事は
山の手術
地球の傷は癒えない

8

午後三時
褐色でふくらみある珈琲
わたしは戻っていく
素の自分へ

9

赤ちゃんの 白くちいさい手
わたしの 黒くシミのある手
どっちも歳月を盛る器

10

HEAVENは
天国
TAX HEAVENは
租税回避地
存在感あるE!

11

えっ もう朝！
苦しさが消え
爽快な気分
乗ってるネ
ライターズハイ

12

「交合」(谷川俊太郎)から流れてくる

性のコメント

水槽の中の鮫も――

13

古希 仮説

喜寿 実験

傘寿 確認

米寿 確立

………

わたしの詩の年譜

14

蓄えたことばを使い果たし

無一物になる

破産だ!

ことばの信用金庫がほしい

15

わたしはこうしたい!!

他人に振りまわされない

絶対の真理

16

肌触りのいい言葉をうける

だれかにやわらかい言葉をわたす

言葉のたすきリレ!

17

ふいと出て行った夫

テーブルにはメロンが二切れ

ニンマリとほくそ笑む娘

グッドタイミング!

18

人は森の中で

道に迷う

道はちつとも変わらないのに

迷路をつくるのは 人

19

寺山修司は

「自分語」を大切にした

詩のことばも輝いていた

20

詩と散文

違いは

ことばのすむ場所

選択は自由

21

「まいどはや まめなげ」

富山の葉売りのおじさんは

旅する語り部

赤玉はら薬 ケロリン せきどめ錠

かぜ薬たるまハイトン 雪の元……

柳行李には信用と健康

遠いむかしの思い出

* 「ごめんください 達者でしたか」

お国訛りの挨拶

22

菜の花

眼にしみる

それに比べて

ワタシは？

- 23 この魚は日本から輸入したのかな？
なんで？
コワイからよ
〈アメリカのテレビドラマ〉
- 24 イカの水鉄砲
一張羅が台無しに
イカのイカリ
- 25 指で地図をなぞる
津軽半島く夏泊半島く下北半島
胃袋は忘れない
美味しい特産品！
- 26 上からたらふく詰め込んで
下からはちつとも出てこない
体には思い出がいっぱい
- 27 大間のマグロの背中に乗って
Vサイン
でっかいモニUMENTの上の
小さいわたし
- 28 うっそうとした森の
しめ縄をめぐらした大樹
反応する霊感
ゾーツ!!

29

パソコンに心がある？
修理に出そうとしたら
急に俊敏に――

30

（早く大きくなあれ）
花に声をかける
（おいしくなあれ）
パンに歌をきかせる
（いい詩が書けるようになあれ）
自分に言いきかせる

31

人生初の
ヒップホップ
すごいぞ
六六歳!!
ステップ・ジャンプ



【あとがき】

今号で6号を数える。自在に変化する言葉を追いながら、号を積み重ねていきたいと思う。

最近、目に見えない世界から照射されてくる得体の知れないものに突き動かされて、詩を遊ばせている。想像の地平からふいに現れる視覚的なイマジユ。

学生時代に、美術部員が裸婦をデッサンしていることを知った。モデルは女子部員。青春真つただ中の私は、NUDEという赤裸々な言葉に面食らい、たまげてしまった。

今なら、分かるような気がする。人も言葉も要らないものを捨て去ったときに、素のままの顔、つまり本質が見えてくる。美術部員は裸ではなく、生のフォルムを見ていたのだ。

自由をテーマに、かたち、手法を変えて詩作しているが、へ私の詩はどこへ向かっているのだろうと考えることがある。

今回初めて、美のエロティシズムに挑戦した。